

発刊のことば

本学大学院は、1998年千葉県八千代市勝田台のキャンパスに産声をあげた。昨年最初の修了生を送り出した後、北区の王子キャンパスに移転し、ほぼ1年を経過したことになる。2000年からは、定員も4.5倍（1学年26名）に増員され、昼夜開講制をとることになった。さまざまな経歴の学生が熱心に受講し、実習に参加している。教授陣も名実ともに充実し、まずまずの滑り出しとってよいように思われる。

大学院発足と同時に、相談センターも開設されたが、実質的に活動が開始されたのは、王子キャンパスに移転してからといえる。名称も「東京成徳大学心理・教育相談センター」と定められた。勝田台キャンパスとは異なり、王子キャンパスでは、その地理的環境の有利さから、多数のクライアントが訪れ、センター長と専任の助手2名を始めとして、ほぼ教員全員が相談活動に参加し、院生の実習の指導にあたっている。ケース・カンファランスや事例研究も定期的に開催され、その都度盛況をみている。

このように、教員の充実、学生数の増員、相談活動の活発化などをふまえ、これを期に大学院と相談センターとが合同で、研究紀要を発刊したいとの提案がなされるに至った。これまでも、紀要発刊の意図がなかったわけではないが、大学の紀要との関連もあったりして、実現の運びに到らなかった。

さて、発刊は決まったものの、その内容をどうするかが一つの問題であった。紀要委員会が構成され、そのことについて、再々検討が重ねられた。それというのも、最初の号であるので、本大学院の実力が問われるのではないかという懸念や、院生のレベルを公けにすることになるなどの思惑などがあつたためである。

一般に研究紀要というと、無審査で論文を掲載するのがふつうであり、したがって教員は比較的気楽に、学術雑誌には投稿し難いような論文を書くことが少なくないように思われる。そのため、論文評価の際に、かなり低くみられる傾向がある。このような一般的な評価は、避けて通れないこととはいえ、本紀要創刊号では、可能な限り質の高い論文の掲載を心がけることにした。

また、研究科の性格上、臨床心理学的な特色の濃い論文を中心にとりあげることに心を用いた。さらに、修士論文からの論文採用にあたっては、慎重な心配りがなされた。数名の査読者による審査が行われ、必要に応じて取捨、修正が求められた。そのことによって、掲載論文の質の向上が計られたのである。

このような心組みで編集された本号ではあるが、最初の意図が完全に実現されたかどうかになると、不安な点がないわけではない。しかし、いずれにしても、創刊号の紀要の完成をみたことに安堵の念を覚えるものである。この紀要に是非目を通していただき、ご高評いただければ幸いである。本気用の発刊を機とし、さらに大学院の充実、発展をめざすことを誓い、刊行のことばとすることにした。

平成13年3月

東京成徳大学大学院心理学研究科長 高野清純